

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、（Ⅱ）は出題者による注です。

ケア（Ⅱ介護や世話）の専門家といえ、看護師や介護福祉士、ソーシャルワーカー（Ⅱ社会福祉活動を行う人）やカウンセラーといった職種のひとがすぐに浮かぶ。お坊さんや「保健の先生」というのも、ある意味でケアの専門家といえるかもしれない。それに対して、獣医さんは人間を相手にするわけではないので、ふつうケア・サーヴィスという職種には数え入れられない。

こういう見方に対してささやかに異議を唱えるのが、精神科医の中井久夫さんだ。

「医療では、ずいぶん患者に無理を強いる。実は獣医学のほうはずっと、相手である動物の意志を尊重している。それは、動物にがまんをさせるということがむずかしいからである。とらえられただけでハンガー・ストライキ（Ⅱ飲まず食わずで抵抗すること）をして死ぬ動物も多い。食べ物が変わるとか、寝床が変わるだけで、拒絶反応をするペットも多い。だから獣医さんたちは徹底的に動物のほうに自分を合わせる。獣医さんたちは、動物の気持ちを察するためにたいへんこまやかな心のアンテナを持っておられる方が多い」。だから、ケア・サーヴィスに「ジュージ」しているひとは獣医さんからこそ多くを学ばないと、中井さんは言う。

「処置」を前に、わたしたちは無言の「弱者」のさしあたっては理解不能なふるまいを、からだ全体のあらゆる感覚を動員して、受けとめなければならない。中井さん一流の言い方を借りると、ア「心のうぶ毛」をはたらかせなければならないのだ。

しかし、ペットを中心としたこの場には、その「心のうぶ毛」を押さえつける、なにか強力な構造（Ⅱ仕組み）の力のようなものが、知らぬまにはたらきだしている。

調子がぐんと落ち込んでいるのに何も訴えない犬、苦痛や痒みに襲われているのに何が起きているのか見当もつかないらしい猫。わたしたちは気が「ドウテン」し、底知れぬ不安に包まれながら、犬あるいは猫を抱きかかえ、獣医さんのもとへ走る。何が起きているのか分からないペットは、苦しいはずなのに、獣医さんがいつも大好きなお菓子をくれるのでたぶんそれを待っている。獣医さんは犬に声をかけながら、聴診器を当て、触診し、最後は注射を打つ。声を立てているのは人間ばかり。訴えもしない犬に

みな視線が集中する。

ある病院の脳外科で看護助手をしていたことのある若い社会学者が、獣医科のあの光景は脳外科の集中治療室の光景に重なりと言った。もの言わぬ患者さんを中心に、すべての言葉、すべての行動が組織される。その一体感、その熱気はすごいものだったと。

もの言わぬ「弱者」、いつてみれば「へこんだ」存在を中心に据えることで、こちら側に形成される強力な秩序。それは、みな関心を一点に「ギョウシュウ」することでできあがる。じぶんたちのなかから何者かを「無力な」存在として押しだし、それにみな視線を集中させることで「わたしたち」という連帯がこちら側に確立される。みな視線を集める（空虚な中心）、その役割は、現代の家族生活では大型テレビやペットが担っている。

じつさい、みながこぞって心配している図というのは、みながこぞって忌避（嫌がって避け）しているという図と、図としては同じである。へこんだ存在をみなが気づかい、いたわることもあれば、それをあざ笑うことで「おぞましい連帯が生まれることもある。ときにそのあざ笑われる者が、なにかの拍子に反転してまぶしい光をハナつということもある。そして、「差別」や「崇拝」と同じこの構造の力が、ケアという場にはたらきださない保証はどこにもない。

獣医さんの多くはこよなく動物好きだろうが、同時に、こうした構造をもつ場を仕切る司祭者のごとくにふるまっている。ものの言わぬ動物を中心に編まれる家族の「フアンタジー（Ⅱ幻想）」の強力な共犯者としても、その場に登場するわけだ。だが、ペイする（Ⅱペットの治療費を支払う）のかという計算もつねに頭をよぎることだろう。「愛らしい」ものを愛でる獣医は、そんな「専門職」としてのクールな顔を背後に隠してもいるはずだ。そして、他方で、飼い主に棄てられたペット、ショップで売れ残ったペットがどのようなプロセス（Ⅱ手順）で「処分」されるかを、シユクチし、憂えてもいるはずだ。

そこで話はケアという仕事に戻る。ケアの場は「やるせないものだ。一度かぎりの解決というものもなくて、果てしない疲労に襲われる。そこには、本人の無念、家族との長年の確執（Ⅱお互いが自分の意見を譲らずに生じる不和）もまた流れ込んでいる。だから

ケアについてはくりかえし「美しい」物語が紡ぎだされるのだが、わたしたちは同時に、そのケアの場がとてつもなく「危うい」場でもあることから眼を逸らせてはならない。見たくないものを見ることが、希望を抱くことと同じくらいたいせつだ。「無力な」者を「善意」でくるみ、「わたしたち」の向こうに押し出してしまう構造、そのような強・弱の関係の外に出ることを、先の中井さんの言葉は説いているのかもしれない。

(鷺田清一『大事なものは見えにくい』より)

問一 155のカタカナの部分で、漢字に改めなさい。一画ずつていねいに書くこと。

問二 ①「おぞましい」・②「やるせない」の本文中における意味としてもつとも適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「おぞましい」

ア 強力な

イ みじめな

ウ けがらわしい

エ ぞつとするような

オ 目にあまるような

② 「やるせない」

ア 許しがたい

イ なじみのうすい

ウ 取り組みにくい

エ 気のゆるむ間もない

オ 気持ちのやり場のない

問三 — ア「『心のうぶ毛』をはたらかせなければならぬ」とありますが、「『心のうぶ毛』をはたらかせ」とは動物の場合、どうすることですか。ここまでの内容をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

問四 — イ「そこで話はケアという仕事に戻る」とありますが、ケアの場とペットを取り巻く場との間には、どのような共通点があると筆者は考えていますか。「強者」と「弱者」という言葉を用いて、わかりやすく説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どんなに頼んでも、父さんはバート・シンプソン人形を買ってくれなかった。母さんはいいと言ったのに、父さんは母さんがぼくに甘すぎると言った。「そうだろうが、え？」父さんは母さんに言った。「なんだっておれたたちがそんなものを買ってやらなきゃならん？ お前はいつもそうやって、息子がちよつと泣き声を出したらすぐに言うことを聞いちゃうんだ」お前はお金のありがたみがわかっていない、と父さんはぼくに言った。こういうことは子供のうちに叩きこまなきゃだめなんだ。バート・シンプソン人形を簡単に買ってもらうような子供が、大きくなつて雑貨屋に押し入るような不良になるんだ。欲しいものは何でも樂して手に入るのが当たり前だと思っているからな。というわけで、父さんはバート・シンプソン人形のかわりに、背中にお金を入れる穴のあった、ださい陶器のブタの貯金箱をぼくにくれた。さあこれでもう大丈夫、息子は不良になつたりしない、というわけだ。

毎朝、ぼくは大きらいなココアを飲まされる。膜がはったココアを飲めば一シケル、膜なしだと半シケル。すぐに吐き出してしまったら何もなしだ。もらったコインをブタの背中に入れて振ると、ガラガラ音がする。ブタがいっぱいになって振っても音がしなくなったら、スケボーに乗ったバート・シンプソンの人形を買っていい。そう父さんが約束したのだ。これならお前のためにもなるからな。よく見るとブタはかわいかった。鼻をさわるとひんやりしていて、一シケルを背中に入れるとにつこり笑い、半シケルを入れてもにつこり笑う。でもなんといつても一番すてきなのは、何も入れないときでもにつこりしてくれることだ。ぼくはブタに名前をつけた。マーゴリス——これは前にうちの郵便受けに住みついていた人の名前で、父さんはやつきになってこの人のシールをはがそうとしたけれど、だめだった。マーゴリスは他のどんなおもちやとも似ていない。とても静かで、ライトも、バネも、液もれのする電池もない。ただ一つだけ、かれがテーブルから飛びおりようとするのだけは要注意だ。「マーゴリス、気をつけろ！ お前は陶器でできてるんだから」マーゴリスが身を乗り出して下の床をのぞいているのを見つけて、ぼくは言う。するとかれはにつこり笑って、ぼくが下におろしてやるまでおとなしく待っている。マーゴリスが笑うとぼくもうれしくなる。マーゴ

リスのためだけに、ぼくは毎朝膜のはったココアを飲む、一シケルを背中に入れて、かれの笑顔がいつもと変わらないのを、ただたしかめたい一心で。「大好きだよマーゴリス」そのあとでぼくは言う。「ほんとだよ。母さんよりも父さんよりも好きだ。何があつても、たとえお前が雑貨屋に押し入つたって、きらいになんかなるもんか。でもお願いだから、テーブルからジャンプするのだけはやめてくれよな！」

きのう父さんがやって来て、テーブルの上にいたマーゴリスを持ちあげて、乱暴に振ったりさかさまにしたりしだした。「やめてよ父さん」とぼくは言った。「マーゴリスがお腹をこわしちゃうよ」でも父さんはやめなかった。「もう音がしなくなったな。つまりどういふことかわかるか？ スケボーに乗ったバート・シンプソン人形があしたお前のものになるということだ」「うん、そうだね」とぼくは言った。「スケボーに乗ったバート・シンプソン人形、すごくうれしいな。でもお願いだからマーゴリスをそんなふうには振らないでよ。目を回しちゃうじゃないか」父さんはマーゴリスをテーブルに置いて、母さん呼びにいった。そして片手で母さんの手をひっぱり、もう片ほうの手に金づちを持ってもどつてきた。「どうだ、おれの言つたとおりだろう」父さんは母さんに言った。「こいつもやつと物の大切さを学んだんだ。そうだな、ヨアヴィ？」「うん」とぼくは言った。「すごくわかつたよ。でもその金づちはなんなの？」

「お前がやれ」父さんはそう言つて、ぼくの手に金づちをにぎらせた。「気をつけるんだぞ」「うん。気をつけるよ」とぼくは言つて、そのとおり気をつけていたけれど、しばらくすると父さんはしびれを切らして言った。「どうした、早くブタを割れ」「え？」とぼくは言った。「マーゴリスを、割る？」「そうだ、そのマーゴリスだ」と父さんは言った。「さあ、早く割るんだ。もうバート・シンプソンを買っていいんだぞ。お前はよくがんばつたからな」マーゴリスは、自分がもうすぐ死ぬ運命なのを知っている陶器のブタの悲しい笑みを浮かべていた。バート・シンプソンなんてどうだっていい。このぼくが、友だちの頭を金づちでかち割るだつて？「バート・シンプソンなんかいらぬ」ぼくは父さんに金づちを返した。「マーゴリスだけでいい」「なにを言ってるんだ」と父さんは言った。「遠慮するな。これは社会勉強なんだから。貸せ、父さんがやってやろう」父さんは金づちをふりあげた。母さ

んがぎゅつと目をとじ、マーゴリスがあきらめたようにほほえむのを見て、ぼくは自分がなんとかするしかないと感じた。ぼくが何もしなければ、マーゴリスは死ぬのだ。「父さん」ぼくは父さんの脚あしにすがりついた。「なんだ、ヨアヴィ」父さんは金づちをもった手を止めて言った。「お願い、あともう一シケルだけ」とぼくは言った。「あしたの朝ココアを飲んで、もう一シケル入れてもいいでしょ？ そしたらきつと割るから。約束するよ」「あと一シケルだとか？」父さんは笑って金づちをおろした。イ「見たか？ こいつ、すっかり克己こつきしん心こつきしんが身についたようだぞ」「うん、そう、こつき心だよ」とぼくは言った。「だからあしたまで待つて」もう涙なみだで声がふるえていた。

二人が出ていったあと、ぼくはマーゴリスを抱だきしめて、好きなだけ泣いた。マーゴリスは何も言わずに、ただぼくの手で小さくふるえていた。「心配しないで」ぼくはかれの耳にささやいた。「きつと助けてやるから」

その夜、父さんが居間でテレビを見おわって二階に上がるまで、ぼくは待った。それからそつとベッドを抜ぬけだして、マーゴリスを連れて忍しのび足で玄関げんかんを出た。ぼくらは暗やみのなかを長いこと歩き、やがてアザミのおいしげる原っぱについた。「ブタは原っぱが大好きだろ」ぼくはそう言つて、マーゴリスを地面におろした。「とくにアザミの原っぱには目がないんだ。お前もきつと気に入るよ」ぼくはマーゴリスが何か言うのを待ったけれど、かれはだまっていた。さよならのかわりに鼻にさわると、かれはただ悲しげにぼくを見つめかえしたただだった。もう二度と会えないのがわかっていたのだ。

(エトガル・ケレットⅡ著、岸本佐和子Ⅱ訳、「ブタを割る」の全文)

問一——ア「さあこれでもう大丈夫、息子は不良になったりしない」とありますが、「父さん」がそのように考える理由を説明しなさい。

問二——イ「見たか？ こいつ、すっかり克己こつきしん心こつきしんが身についたようだぞ」「うん、そう、こつき心だよ」とありますが、「克己心」「こつき心」という書き分けがされていることに注意しながら、ここでの「父さん」と「ぼく」の気持ちをそれぞれ説明しなさい。

問三 この話は、「一人の少年がブタの貯金箱との心の交流を通して、『友人を愛すること』を体験する物語」と考えることもできます。少年にとって「友人を愛する」とはどのようなことであつたと考えられますか。文章全体の展開をふまえて、自分の言葉で説明しなさい。

A
国
語

15

解
答
用
紙

受験番号	
氏	名

一

問一

1

--

2

--

3

--

4

--

5

--

問二

①

--

②

--

問三

--

問四

--

二

問一

--

父さん

--

問二

ほく

--

問三

--